



# DE Webinar

- (第1回) 「複雑性と評価」 2019/6/19 (水)  
(第2回) 「社会正義と評価」 2019/6/27 (木)

## 追記

今田 克司  
2019/6/28



# はじめに・お礼

今回は、私が「勝手に熱くしゃべる」 Webinar2回シリーズにご関心をもってください、ありがとうございました。2回フルに参加された方にも部分的にしか参加されなかった方にも心より感謝申し上げます。

昨晚の第2回を終えて、少しだけ追記を書かせてください。「この部分、大事だと思うんだけどちゃんと伝えられなかった」という私にとっての残り香の部分です。



# 追記はこの部分についてです



2月のDEI研修に登場した  
マイケルは、この話をした

アーレントの「悪の凡庸 (the banality of evil) 」\*を反転させて、Elizabeth Minnich が、The Evil of Banality: On the Life and Death Importance of Thinking (Rowman & Littlefield, 2017) を書いた。これにマイケルは書評を書いた。

Michael Quinn Patton,  
On the Life and Death Importance of Thinking, American Journal of Evaluation,  
2019 Vo. 40(I), 137-146

\*ハンナ・アーレント『エルサレムのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告』

マイケルは、Banality of Evaluation があるという。Anything can be done thoughtlesslyだと。The banality of goodness というMinnichのフレーズに大きな知的刺激を受けたという。

つまり、悪いこと良いことの隔てなく、思考停止は起こる。思考停止が起きていても仕事はできる。評価の仕事もできる。が、Minnich は、まさにアーレントがしたように、その危険性を現代史（ナチズム、ルワンダの大虐殺）をひもとして教えるという。

**現代の危険は、思考をやめてしまうこと。。。思考をやめても生きていける時代になったということ。。。。**



## 追記（１）

アーレントの『エルサレムのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告』については、なんとなく、「みんな知っているかな」という感じでさらりと通り過ぎてしまいましたが、そうでもないかもしれないので、ちょっと補足してみます。

アーレントは、ナチズムとユダヤ人大量虐殺がどうして可能だったかを知りたいと思い、それに生涯をかけ、「全体主義の起原」を書き、「人間の条件」を書きました。「エルサレムのアイヒマン」は、ヒトラーの部下であったアイヒマンがどうしてあそこまで無慈悲・残酷になれたかという探求でした。

アーレントの結論が「悪は陳腐である」です。考・え・な  
け・れ・ば・な・ん・で・も・で・き・て・し・ま・う。



## 追記（２）

アーレントの弟子であったMinnich は、それをひっくり返して「陳腐は悪である」と言います。マイケルはその反転に刺激を受け、「陳腐さ」はなんにでも（善悪を問わず）宿ることに思い至ります。であれば、「評価も陳腐になれる」ということです。

陳腐な評価とは、

So much of evaluation is done with a compliance mentality, just going through the motions. The banality of evaluation: thoughtless, mindless compliance. I have called this mechanistic use (Patton, 2008, p. 108), doing an evaluation because it is required, so it is done, but the motivation is compliance and the implementation is mechanical.

Michael Quinn Patton,  
On the Life and Death Importance of Thinking, American Journal of Evaluation, 2019 Vo. 40(1), 137-146, p.140.



## 追記（3）

マイケルが私たちに教えるのは以下です。

評価という「みんなで考えるチャンス！」を単なる作業にしないように。単に「手順通りにやって報告書書いてそれで事業が終わりにできる」ものに押し込めないように。押し込められそうになったときに押し戻せるように。みなさんを評価的思考が助けますように。

でも私がこの追記で言いたいのはこのことではありません。以上のことは、Webinar自体で十分伝えた（勝手に）思っています。

私が言いたいのは次のことです。



## 追記（４）

「陳腐さ」への誘惑が日常にあふれています。そもそも考えることはめんどくさいこと、エネルギー（脳力）を使うこと、時間がかかること（忙しくて考えているヒマなんか無い！）です。現代は、それに輪をかけて、考えなくても生活していける便利さが身の回りにあふれています。

そんな時代に、私たちはどうやって評価を機械的作業に押し込めるのを防ぐことができるのでしょうか。どうしたら評価的思考をいつも自分の中心においておくことができるのでしょうか。評価者としての自分にとって、そして評価に関係するあなたのまわりの人々にとって。

私はそれは、「怒り」「悲しみ」「不安」といった、unsettling な自分の感情としっかり向き合うことだと思います。



## 追記（５）

アーレントはユダヤ人として、ナチズムに生涯向き合いました。知力総動員です。でも動員されたのは彼女の知力だけではないでしょう。彼女はユダヤ人です。相手はナチズムです。

Unsettling な感情は、評価的思考の源になるはずです。そしてそれを持ち続けるためには、例えば被災者に寄り添う、例えば不正から目を逸らさない、例えば人類の負の歴史から学ぶ、例えば困りごとを持つ人に手を差し伸べ一緒に考える、例えば少数者のアート表現に触れる。ナチズムとは比べられないかもしれませんが、Unsettling な感情を沸き立たせる機会はたくさんあります。みなさんはそもそもそういう機会を大切にしている人々だからこそ、ここにたどり着いたのだと思います。





## 追記（6）

Unsettling な感情が評価に直結します。

そして、そう考えると、評価がなぜ社会正義とつながるのか、もう一つの側面が見えてきませんか？ そう、陳腐さに抗すること（評価の二枚腰の二枚目）と悲しみや怒りとともにあることは、同居しているからです。悲しみや怒りを沸き立たせる事象を変えることが社会正義だとすれば、評価はそういった感情と思考の接合点にあり、評価者はその渦中に置かれています。

長い追記も、これで終わりです。

（追伸） マイケルの On the Life and Death Importance of Thinking, American Journal of Evaluation, 2019 Vo. 40(I), 137-146 を読みたいという方は、私までご連絡ください。メール添付のPDFでお送りします。



# おわりに・お礼

今回、2年間のDE研修の私なりの学びのまとめが不十分でもできたのは、この研修事業と一緒に歩んでくださった参加者、スタッフ、その他関係者の方々のおかげです。千葉直紀さん、中谷美南子さん、白石邦広さん(1年目)はわがままな私につきあって一緒に事業を作ってくださいました。CSOネットワーク、日本ファンドレイジング協会、日本NPOセンターから本事業に関わってくださったみなさん、助成を提供した日本財団に感謝申し上げます。そしてもちろん、我らがマイケルとケイトには最大限の賛辞を送りたいと思います。



さいごに、終わったあとですが、「DE引き出し集」の私の執筆分と本Webinarは、ある場所によって可能になったとお伝えしたいと思います。それは、北海道上川郡東川町の町立図書館、せんとぴゅあIIです。いわば Happenstance で私のための思索と執筆の場になりました。その空間にお